

父母の恩

令和五年五月法話 薬師寺 管主 加藤朝胤

『佛説父母恩重経』（ぶつせつ ぶもおんじゅうきょう）

父母の恩重きこと天の極まりなきが如し 父母に十種の恩徳あり。何をか十種と為す。

一、懐胎守護の恩

十ヶ月の間、行住坐臥ともにもろもろの苦悩を受く。苦悩止む時なきが故に、愛欲の念を生ぜず。血を分け、肉を分かちて、身重病を感ず。

二、臨生受苦の恩

業風催促して遍身疼痛し、骨節解体して苦しみ耐え難し。心神脳乱し、忽然として身を亡ぼす。父も母と子とを憂念し諸親眷属皆悉く苦悩す。

三、生子忘憂の恩

子が誕生し、この声を発するを聞けば、貧女の如意珠を得たるが如し。己も生まれ出でたるが如し。

四、乳哺養育の恩

母の膝を遊び場となし、母の乳を食物となし、母の情けを命となす。母にあらざれば育てられず。母にあらざれば養われず。

五、廻乾就湿の恩

水の如き霜の夜にも、氷の如き雪の暁にも、乾ける処に子を廻し、湿りし処に己臥す。

六、洗濯不浄の恩

子、己が懐に尿り、或いはその衣に尿するも、手自ら洗い濯ぎて臭穢を厭うことなし。

七、嚙苦吐甘の恩

食味を口に含みては、これを子に哺むるにあたりては、苦きものは自ら嚙み、甘きものは吐きて与う。

八、為造悪業の恩

子の為に止むを得ざる事あれば、自ら悪業を造りて悪趣に墮つることを甘んず。

九、遠行憶念の恩

子、遠く行けば、帰りてその面を見るまで、出ても入りてもこれを憶い、寝ても覚めてもこれを憂う。

十、究竟憐愍の恩

己生ある間は、子の身に代わらんことを念い、己死に去りて後は、子の身を護らんこと願う。

父母の恩重きこと天の極まりなきが如し

父に慈恩あり 与楽
母に悲恩あり 抜苦

自らの宿業（因）＋父母（縁）＝誕生（果）
気を父の胤に稟けて、形を母の胎に托す

生物発生の原則（ヘッケル・ドイツの生物学者 1834～1919）

反復説ともいい生物の発生に関する原則で、「個体発生は系統発生が短縮され、かつ急速に反復されるものであり、この反復は遺伝と適応の生理的機能によって規制される」

系統発生的生命と個体発生的生命

太陽系が出来たのが50億年前、地球に海が出来たのが40億年前、30億年前にその海の中に最初の生命として単細胞生物が生まれ、種の変移或いは進化して多細胞生物になった。それが植物や動物になり、魚類・両生類・爬虫類・哺乳類になり、人間になった。この宇宙における生命の流れは、30億年という途方もない長さで続いてきた。その30億年かかって発達変化してきた生命を「系統発生的生命」という。それに対して母親の胎内に宿って十月十日で生まれ、死ぬまでを「個体発生的生命」という。「個体発生は系統発生を繰り返す」と言われるように、30億年の系統発生的生命の過程を、母親の胎内でもう一度繰り返すのである。初めから小さな人間として胎内に宿るのではなく、下等な単細胞生物としてあるだけで、それが魚になり動物になり最後に人間として生まれてくる。その変化していくものが、よく間違ってもせず人間となって生まれてくるところが実に不思議である。今日元氣なのは自分の力だけのよう思うけれど、むしろ自分の力はほんの一部に過ぎない。今呼吸に必要な肺の動きや胃の状態を自分で調節している人がいるかと言うと、全て我々の知らない間にうまく働いていてくれて、そのお蔭で生かされているのである。不思議な仕掛けと働きが今も体の中にあつて生かされていることを思うと、心の底から有り難くなり、感謝せずにはいられない気持ちになる。

『さあがんばろう』平沢 興

ヒト

生物の一種 動物界・哺乳綱・サル目・ヒト科・ヒト属・ヒト種
学名 ホモサピエンス

胎生の五位 『阿毘達磨俱舍論』（あびだつまくしやろん）

凝滑 最初の七日間でぬるぬるした滑らかな塊の状態
胞 次の七日間で滑らかな塊の周りに薄い皮が生じる状態
血肉 第三週目で血と肉とにわかれる状態
堅肉 第四週でこの間に個体になる
支節 第五週目からの三十四週間で手足や骨格など人間の身体として整う時期

三十八週間二百六十六日